

Newsletter 32

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第32号 / 2018年5月16日発行

Contents

- 巻頭言 理工坂
- 特集I 基盤研究「教養研究」、「学びの連携」プロジェクト
- 特集II 研究サポート「研究の現場から」、読書会推進企画「晴読雨読」
- 特集III 【教養研究センター設置科目】身体知・音楽／生命の教養学／身体知・映像／身体知／アカデミック・スキルズ／学習相談
- 特集IV 「情報の教養学」「日吉キャンパス公開講座」
- 特集V 「日吉行事企画委員会（HAPP）」「カドベヤ」「教養研究センター選書」
- 活動予定 4月～9月、「学会・ワークショップ等開催支援」
- 私の〇〇自慢



理工坂

荒金直人（理工学部）
Naoto Arakane

私は、理工学部所属で日吉キャンパス来往舎に研究室を持つ文系教員なので、理工学部の三・四年生または理工学研究科の大学院生のための授業や、あるいは教授会その他の会議があるたびに、日吉キャンパスと矢上キャンパスの間を往復しています。多い時には一日に三往復するようなこともあります。徒歩で片道五分程度の距離ですが、二つのキャンパスは二つの丘の上にあるので、両キャンパス間を移動するには一度坂を下って谷に降りてから、再び坂を上らなければならず、対岸——と言って差し支えないと思いますが——に到着する頃には必ず息切れしており、ちょっとした運動になっています。

二つのキャンパスを繋ぐ経路は二つありますが、私がいつも通るのは、より人通りの少ない裏道です。来往舎の裏側から出て、化学・物理学・生物学の研究室のある第二校舎の前を通り、体育館+スポーツ棟と日吉記念館（只今工事中）の間を抜け、音楽・美術・心理学の研究室のある第八校舎の横を通ります。多くの異なる分野の研究室や教室を一瞬で通り抜ける感覚です。そして、「理工坂」と呼ばれる191段（実測）の階段を下ります。日吉の森の片隅を縁取る位置にあるので、ほんの一瞬ですが自然に囲まれるような気持ちになります。この坂を降りて矢上キャンパスへ向かうとき、そしてこ

の坂を登って日吉キャンパスに戻るとき、いつも心に浮かんで消える、哲学者ブリュノ・ラトゥールの一節があります。

しかし、二つの文化についての論争それ自体は、一体何に起因するのだろうか。キャンパスの両側の間での分業に起因する。一方の陣営は、科学が正確であるのは、主観性や政治や情熱による一切の汚染から浄化されたときのみであると考え、それより遥かに大きな広がりを持つもう一方の陣営は、人間性や道徳や主観性や権利には、科学や技術や客観性との一切の接触から保護されたときのみ価値があると考え。科学論に身を置く我々は、これら二つの浄化、両方からの純化と同時に戦っており、そのことによって我々はどちらの陣営にとっても裏切り者になる。（Bruno Latour, *Pandora's Hope*, Harvard University Press, 1999, p.18）

私は、日吉キャンパスから矢上キャンパスが見える場所と、逆に矢上キャンパスから日吉キャンパスが見える場所の両方が好きで、飽きもせず何度も一方から他方を見て、しかしその二種類の景色が——丘の立体感のせいなのか——いつまで経っても自分の中で俯瞰的な統一像を形成しない感覚を楽しんでいます。そして、日吉と矢上の地理的な位置関係が「文」と「理」の関係の隠喩になっているように思え、一歩一歩下っては上るしかない「理工坂」に、ますます愛着を感じるのです。



基盤研究「教養研究」

講演会 no.2 毛利三彌氏

「教養と演劇：現代人にとって、演劇は教養となるか」

基盤研究「教養研究」2017年度第2回目の研究講演会が、2017年12月12日（火）18時15分より行われました。講師は、元日本演劇学会会長・成城大学名誉教授の毛利三彌先生、司会は小菅隼人が務めました。毛利先生は、日本におけるイプセン研究の第一人者であるばかりでなく、日本の演劇学をリードし、日本の演劇研究を国際舞台に引き出した立役者でもあります。

講演は、まず、外来概念であった「教養」のイメージの変遷を確認することから始まりました。すなわち、積極的な意味を持っていた「教養」は、1960年代から70年代にかけての大学紛争時に急激に肯定的な意味を失い、ついには1991年の大学設置基準大綱化によって、少なくとも大学教育においては必須ではなくなります。これとシンクロするように、1960年代の動きは、西洋演劇の移入で始まった新劇に対し、まさにその教養主義的なあり方を批判したアングラ演劇の台頭してきた時期でもありました。そして、昨今、またも「教養」が積極的な意味を持つようになったのと軌を一にして、かつてアングラ演劇で暴れていた俳優たちは、いまやTVや舞台の中心的なスターとして、多大な人気を得るようになったという現象が起こっているのです。

それ程「教養」は揺れているわけですが、いずれにしても、近代日本の「教養」はヨーロッパ起源の外来概念であり、その根底にはギリシャ演劇の起源となった「議論」があったことを確認すべきだと毛利先生は述べます。公共広場であるアゴラあるいはフォルムにおいて自分の意見を闘わせる、それは喧嘩口論とは異なり、意見や価値観の交換であり、日常生活における対立には発展させない作法としての「議論」なのです。その「議論」が基本的に対話形式をとる西洋ドラマの根底にあり、この習慣が基本的には日本にはなかったし、今でも日本人には身につけていないと毛利先生は主張します。別の場ではありますが、かつて筆者は、毛利先生が川島武宜『日本人の法意識』（岩波新書）を引きつつ、河竹黙阿弥『三人吉三』に見られる日本人の仲裁的調停による紛争解決と西洋ドラマに見られる議論との差について講演されたのを聞いたことがあります。これはどちらが良いという問題ではありませんが、少なくとも本講演においては、議論する技術を身につけることが今後の大学教育にとって必要だという立場を毛利先生はとっておられました。確かに、大学のゼミナールにおいても、あるいは教授会においてさえ、対立はあっても議論は殆ど見受けられないのが実態かもしれません。

講演後の質疑応答では活発な意見交換が行われ、「教養」の本質論としても、教育論としても非常に示唆的、刺激的な研究会となりました。当日は、約20名の出席者がありましたがいつになく学生の参加が多かったことを心強く思いました。

(小菅隼人)



講演の風景

「学びの連携」プロジェクト

2017年度第1回公開セミナー

「効果的な論文指導を目指して—英語論文編」

第1回公開セミナーのテーマは、英語論文の指導法でした。2017年12月13日（水）18時15分より日吉キャンパス来往舎中会議室でワークショップが行われました。2016年度は「日本語論文編」が開催され、今回はその続編になります。本セミナーでは、ライティング研究から得られた知見をもとに、最新のツールを用いた論文指導の方法を紹介させていただき、英語論文を指導する際のポイントを2点挙げました。

1点目は、ジャンルに基づいた指導を行うという点です。つまり、どのような文章ジャンルを書く（指導する）のかを、指導者と書き手が明確に理解することが大切です。例えば、学術論文と授業レポートでは、その目的、読み手、構成、書く内容が異なります。また、学術論文の中でも、序論と結論のセクションではその目的や構成要素は異なるため、対象となるセクションの目的や構成要素を認識する必要があります。授業中に行うタスクの例として、論文の要旨（abstract）の言語的特徴を分析する活動を行いました。参加者は実際に英語の要旨を読み、どのような構成要素が書かれているのかを識別する中で、必須要素と選択的要素があることを確認しました。

2点目は、補助ツールを活用して書き手の自律を促すという点です。最新ツールには、英語論文支援執筆ツール AWSuM (Academic Word Suggestion Machine) があります (<http://langtest.jp/awsum/> 参照)。これは水本篤氏（関西大学外国語学部教授）らが開発した無料オンライン・ツールです。対象分野と書きたい論文のセクションを選ぶと、当該セクションで頻繁に使われる定型表現を示唆してくれる優れたものです。書きたい情報や単語は頭にあるけれど適切な表現が思い浮かばない時などに役立ちます。また、補助ツールによって、言語使用の観点から明示的な文章指導や支援が可能となります。

論文執筆も指導も、時に難しく悩ましいものです。しかし、ジャンルに基づく文章指導によって論文の修辞構造に対する意識を高め、ツールを上手く活用することによって、より効果的・効率的に個々の書き手を支援できるようになることが期待されます。今回も様々な学部の学生や教員の皆さまのご参加があり、和やかな雰囲気でのセミナーとなりました。参加者の皆さまの率直なご意見や興味深い経験談を通して、私自身多くの発見と学びがありました。貴重な機会を設けていただきありがとうございました。(大野真澄)

「学びの連携」プロジェクト 2017年度 第1回公開セミナー

効果的な論文指導を目指して—英語論文編

このセミナーは、英語論文の指導法について、最新のライティング研究から得られた知見をもとに、最新のツールを用いた論文指導の方法を紹介し、英語論文を指導する際のポイントを2点挙げました。

日時 2017年12月13日（水）18:15～20:00
会場 来往舎1F中会議室（来往舎2階）中会議室
講師 水本篤氏（関西大学外国語学部教授）
司会 小菅隼人（成城大学）
参加費 25名（参加費 無料）
対象学部 全学部（学部・学科を問わず参加いただけます）
申し込み <http://liberalarts.keio.ac.jp/awsum/> まで
お問い合わせ 成城大学教養研究センター
 TEL: 03-3582-3111 FAX: 03-3582-3112

研究サポート「研究の現場から」

〈第21回「研究の現場から」〉
〈群集〉の文法

—19世紀前半のドイツ文学を中心に

1789年の革命以降、旧来の身分秩序が崩れ社会の平準化が進む中で、ドイツ文学では都市に溢れ返る人の群れ、〈群集〉を描く作品が増えていきます。クライストという作家もその一人です。まずはクライスト文学における〈群集〉の解釈史を例に戦後ドイツの文学研究の流れを概観し、研究者たちの「〈群集〉の読み方」の中に同時代の状況や言説が色濃く表れていることを確認しました。続いて問題にしたのは、〈群集〉という現実の現象を表現する作家たちの「〈群集〉の書き方」です。〈群集〉を外から冷静に観察するゲーテや〈群集〉の中に享楽的に飛び込むホフマンに対し、クライストには〈群集〉の内部で働く独自の論理を描き出すための一種の詩的な「文法」が見られることをお話ししました。多分野の先生方にお集まりいただき、非常に刺激のご意見を伺えたこと、心より感謝申し上げます。

(西尾宇広)

【2017年12月20日(水) 18時15分～ 来往舎101にて開催】

【予告】

第22回「研究の現場から」

「研究の現場から」は、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話していただき、参加者と語り合う催しです。軽食も出るざっくばらんな雰囲気のでき、どうぞ気軽にお集まりください。

(高橋宣也)

2018年5月30日(水) 18時15分～ 来往舎101にて

・杉山有紀子(理工学部)

「ヨーロッパ・ユダヤ・オーストリアのはざままで—S. ツヴァイクと20世紀オーストリア文学」



12月20日開催 第21回「研究の現場から」

読書会推進企画「晴読雨読」

読書会『晴読雨読』「ブルーノ・ラトゥール『科学論の実在—パンドラの希望』を読む」

昨年度のレイヴィナスの読書会に引き続き、2017年4月からはフランス人哲学者ブルーノ・ラトゥールの『科学論の実在—パンドラの希望』を読みました。4月26日(水)の第1回以降、5月31日(水)、6月21日(水)、8月2日(水)、10月11日(水)、11月1日(水)、12月13日(水)、1月17日(水)、3月30日(金)とほぼ1か月に1回のペースで全9回開催しました。けっしてわかりやすい内容の本ではありませんが、ラトゥールの翻訳もされている理工学部の荒金直人先生が毎回丁寧に解説してくださるおかげで、科学の見方・考え方がずいぶん変わってきた気がします。慶應の教員・学生だけでなく、関心をもたれたさまざまな方々が参加してくれているのもこの読書会の特徴です。2018年度からはハンナ・アレントの『人間の条件』を読む、あらたな読書会がスタートする予定です。みなさんの参加をお待ちしています!

(工藤多香子)

読書会『晴読雨読』

「田辺元『懺悔道としての哲学』を読む」

●弱い思想と強い調子

田辺元の『懺悔道としての哲学』を読んでいます。10月18日(水)に第1回。引きつづいて11月29日(水)に第2回を来往舎の会議室で、12月27日(水)に第3回を同じく小会議室で、1月24日(水)に第4回を、3月28日(水)に第5回を同じく207室で行い、今後何回か継続の予定です。読み進めて感じるのは、田辺の調子の高さ、思い詰め方の圧倒的強度です。敗戦で絶望と無力を思い知った日本人の先端的代表のつもりで、田辺は「人間よ傲るな」と説いてやまないのですが、そこに「どん底を見た日本人だからこそ最先端に行ける」という激しい矜持が入ってくる。「傲るな」という思想は「弱い思想」になるはずですが、田辺は声高になります。そこに戦時中の「死生観」から延長しないと分かりにくい価値観も入ってきます。矛盾の渦巻く坩堝のような哲学を、この不透明な時代を生きる糧として、更に読み進めてゆきます。

(片山杜秀)

教養研究センター設置科目



設置科目は言うまでもなく教養研究センターの活動の柱です。近現代日本の「教養教育」はいわゆる座学、つまり学生が席に座って一方的に受けるだけの授業が基本でしたが、当センターは、その歪みを是正するような、学生の参加や作業を促す授業を設置当初から開設して「新しい教養教育」を目指してきました。2017年度の成果をご紹介します。

(片山杜秀)

2017年度の「アカデミック・スキルズ」「コンペティション」

アカデミック・スキルズは2017年度も例年通り、3つの日本語クラスと1つの英語クラスを通年で開設しました。学部設置の授業でも似た内容の少人数向け講座が増えてくるだろうと観察されるので、「本家」としての当講座も、改めて意義や内容が問われる時期に入ってきているように思われます。喫緊の課題です。とにかく講座の成果を示す恒例のコンペティションは、まず2月5日(月)に論文部門の審査会が行われ、ついで2月7日(水)にプレゼンテーション部門の発表会が来往舎のシンポジウムスペースで開催されました。論文の出品は各クラス2本ずつの8本、プレゼンターは各クラス2人ずつの8人で、例年通りの規模でした。論文部門では金賞が2つ出ましたが、テーマがそれぞれ障害者雇用と児童虐待であったことに時代が見えます。2011年の東日本大震災以後、学生の社会に対する意識は先鋭化してきたと思いますし、少子高齢化や格差の増大や福祉の行方への危惧といったところに敏感な学生の問題関心は寄りがちになっていでしょう。プレゼンテーションでは薬学部の学生が大きく抜き出る評価で金賞を得ました。薬学部生が日吉に学ぶようになってちょうど10年目。日吉という器もどんどん変貌し、自由で多様なタレントが育ちつつあることが実感されます。

(片山杜秀)

「アカスキを振り返って」

論文部門金賞の受賞にあたり、指導してくださった木曜クラスの先生方と、最後まで健闘しあった2名の学生には心から感謝しています。思い返してみると、課題の提出期限には毎週のように追われていましたし、突破口が見出せず苦労したことは何度もありました。ただ、振り返ってみると本当にあっという間で、文章を書くことが苦手な頃で避けてきた頃自分からは想像もつかないくらい、アカスキを通して成長することができました。それは論文を書く技術やプレゼン技術のみならず、社会で通用するマナーや、自分が興味を寄せる分野についても改めて知ることができました。金賞をいただいたことは大変光栄なことですが、この結果に満足することなく、これからも励んでいきたいです。

(商学部2年 岡井華奈)

「教養の糧となった一年」

アカデミック・スキルズの授業で得た知識、経験は、私にとって大変有意義なものになりました。また、様々な事に興味・関心を持っている方々との議論は、視野を広げるものとなりました。一年間の学びの集大成となるコンペティションにおいて、プレゼンテーション部門で金賞をいただいたこと、さらに講評では「おもしろかった」と言っていたこと、光栄に思います。多くの方にとって馴染みのない生物であるクラゲの興味深さを、馴染みのない事象を例に、さらにヒトの「生きている」という認知への考察に絡めて伝えることは、非常に困難なことでした。試行錯誤の末、クラゲのおもしろさが伝わり大変嬉しかったです。

この度の結果は、懇切丁寧にご指導くださった先生方、そして毎週議論を交わしあったクラスメートの方々のおかげです。学びを深める機会をくださったアカデミック・スキルズに、心より感謝致します。

(薬学部1年 米津好乃)

コンペティション入賞者一覧

■論文部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金賞	水曜	法・2	江波戸水紀	障害者雇用を通じた差別なき社会へ—日本の障害者雇用の課題—
金賞	木曜	商・2	岡井華奈	児童虐待相談対応件数の地域差の原因—大阪府と鳥取県の虐待分析—
銀賞	水曜	理・1	菊地 敬	合唱コンクール審査法考察
審査委員特別奨励賞	金曜	医・1	井原慶子	"Pride and prejudice" の 'pride' に込められた意味—日本語訳を手がかりにして—

■プレゼンテーション部門

賞	クラス	学部・学年	氏名	演題
金賞	水曜	薬・1	米津好乃	「生きている」という認知—クラゲに生物らしさを感じるのなぜか—
銀賞	木曜	文・1	伊藤社一郎	真の共生の模索—フロアホッケーを通して—
銅賞	月曜(英語)	法・2	會田純平	The work environment of people with disabilities (障害者の就労状況)

「身体知・音楽」と ヘンデル《メサイア》公演

極東証券寄附講座「身体知・音楽I, II」と龍角散寄附講座「同 III, IV」の合同クラスによる今年度の公演は、2018年2月6日(火)協生館藤原洋記念ホールにおけるヘンデル作曲《メサイア》の全曲演奏会でした。最先端で活躍する若手一流演奏家を中心とするオーケストラと演奏会を開催しました。

両クラスでは、専門の音楽家からの指導を毎回の授業で受け、《メサイア》という難曲のひとつひとつのフレーズを音楽的に処理する訓練を受けました。指導の成果とメンバーの努力で、かなりの高いレベルまで到達したと言えるでしょう。今回の公演では、一般の方々、専門の方々、招待者の方々と併せて約400名が来場し、高い評価を受けています。課題も多く見えてきましたが、今後の外部専門家や海外の他大学とのコラボレーションに布石を打つ重要な経験でした。

(佐藤望)



身体知・映像

2017年度の「身体知・映像」もオーディションとともに始まった。数十名の候補者から20名を選出す作業は、なかなか大変だ。そして今年は2名の脱落者を出してしまった。映像を全員で制作するというグループ作業とオリジナリティを出したいという個人個人の欲望とのせめぎ合いが、いつもはざりざりのところで調和を見せるのだが、今年は、そう簡単にはいかなかった。どうしてだろう。その理由を探ることは、教養教育の一環として映像制作を教えるわれわれにとって大きな意味を持つように思われる。とはいえ、秋学期の最終課題も無事完成しているので、授業としては及第点であろう。今年は川上弘美の短編集『なめらかで熱くて甘苦しくて』から「アクア」と「テラ」を選び、映像化した。その成果をアカデミック・スキルズ・コンペティションにて上映する。

(佐藤元状)

「生命の教養学—感染」 知的な刺激に感染する!

本年度は、何がどのように感染するのか、感染されたものはどのように対応しているのか、という問いをめぐり多角的な講義を展開しました。病原菌の感染については、生物学的な基礎知識を踏まえた後で、予防接種、世界的規模で見た公共衛生政策、さらには感染の広がりを数理学的に捉えるアプローチについて学びました。また近世のベストと現代のエイズを巡る医学史的な講義を通じて過去の人間と感染との関わりについて学びました。そして、コンピューターウイルスについて、さらに「文化」や表象をも感染という角度から捉える講義は、「生命の教養学」としては過去最多の100名以上の学生の考え方を広げるものでした。彼らの熱心な参加はしばしば講師を驚かせる程の高い質の質疑応答から窺えました。総じて知的な「ウイルス」の「感染」に成功したはずです。

(赤江雄一)

夏期集中講座 身体知 「現実と非現実」

今年の夏期集中講座の身体知では、「現実と非現実」をテーマとして、朗読・身体表現・他者から聞く・創作する、という過程を経て、最終日に創作したものを公開で発表しました。切り口として取り上げた作品は藤枝静男の「家族団欒」、そしてアメリカの若手作家、ジョー・ミノの“People Are Becoming Clouds (人は雲になる)”の2作です。今年は雨続きの6日間で、戸外でのワークショップができなかった分、屋内で作品を読み込み、他者の朗読を聞き、新たな解釈を導き出す時間をたっぷりと取ることができました。世代を超えて集まる一人ひとりが、他者の声から導き出される新たな解釈を披露しあうことで、まったく異なる作品世界が導き出されていくと同時に、作品を通じての他者理解も同時に行うことができたという実感があります。最後の創作発表会では、個人の創作と朗読のみならず、世代を超えたグループによる創作発表で大いに盛り上がりました。最後の振り返りでの、参加者の一人の言葉が忘れられません。「この6日間こそが非現実そのものでした。現実に戻るのが寂しいですが、この非現実には忘れられないものとなるでしょう。」

(横山千晶)

情報の教養学

2017年度秋学期「情報の教養学」講演

2017年度秋学期の「情報の教養学」では、情報技術に関わる講演を3件開催しました。まず、佐々木渉氏（クリプトン・フューチャー・メディア（株））は、バーチャル技術を扱った初音ミクの生い立ちから今までの多大な影響と共に、今後の展望について紹介しました。次に、加藤真平氏（東京大学）は、車の完全自動運転を実現するために必要となる様々な技術を解説されました。加藤氏が開発した技術の一部はオープンソースソフトウェアという形で一般に公開されています。最後に、杉本麻樹氏（理工学部）は、バーチャル技術を発展させるために、視線や表情などをいかにコンピュータを使って計測し、分析し、利用するかについて、応用例を交えながら解説されました。いずれの講演も、誰でも接してきた、またはこれから接するような技術を対象としており、わかりやすかったこともあって、大変好評でした。なお、2018年度も、春・秋学期に3回ずつ講演を実施する予定です。（高田真吾）



2017年度
秋学期ポスター



【情報の教養学】 2018年度春学期スケジュール

第1回 「ネットのダークマター—止まらない海賊版でマンガ・アニメは減るのか?」

講師：福井健策
5月9日（水）18:15~19:45
来往舎 シンポジウムスペース

第2回 「炎上とサイバースケード（集団極性化や社会的分断）」

講師：田代光輝
5月16日（水）18:15~19:45
来往舎 シンポジウムスペース

第3回 「fake news（仮）」

講師：堀潤
5月21日（月）16:30~18:00
第4校舎 B棟 39番教室



日吉キャンパス公開講座

2017年度日吉キャンパス公開講座「観光と開発」を終えて

今年度の日吉キャンパス公開講座は10月7日（土）～12月9日（土）の日程で開催されました。2017年が国連の「開発のための持続可能な観光の国際年」ということもあり、今回は「観光と開発」をテーマに、様々な講師の方に講義をお願いしました。理論的な部分では、観光学や環境経済学、コミュニティデザイン論、スポーツツーリズムなどの分野からの講義があり、観光を地域作りに生かす議論や、アウトドア活動についての議論などが行われました。また特定の時代や国・地域を中心とした講義では、近代ドイツや中世ローマ、19世紀のグランドキャニオン、中国の宗教的聖地、「地元」横浜の崎陽軒やペルーの和食、ロシア土産のマリョーシカ、さらには南極や火星などが取り上げられ、大変にバラエティに富んだものとなりました。観光自体は身近な行為ではあっても、これを開発の問題とセットで客観的に捉え直し、そこから講師の方々の専門に分け入っていくという内容に、受講者は大いに知的好奇心を刺激されたようです。大学の研究の一般への還元という点でも、今回の公開講座は大きな成功を収めたといえるでしょう。（山下一夫）

観光と開発

2017年
10月7日(土) ~
12月9日(土)

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座 (全8回)

観光は、経済や社会などの歴史的発展をもたらすだけでなく、教育を兼ね、人々の相互理解を促進し、地域の発展を創出すべき責務を担っています。また、観光は可能にするためには、施設や交通などを整備する必要があるため、開発とは表裏一体の側面にもあります。また、観光は、観光客の行動から観光客の意識や文化の意識を生むこともあります。2017年は、国連によって定められた「観光の年の年」である観光の国際年でもあり、本講座では、「観光と開発」をテーマに、様々な分野から講演を行います。

講座内容	講師
10/7 ① 発展としての「観光」 ② 「道下」の地誌から	金川廣生 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
③ 観光と地域づくり	野田洋行 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
10/21 ④ 高度成長期における観光 ⑤ 中国の観光発展と開拓	山下一夫 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
⑥ スポーツ観光概論	細田衛士 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
10/28 ⑦ スポーツツーリズムによる地方発展 ⑧ 観光と観光客の行動	山本文彦 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
⑨ 環境と観光	細田衛士 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
11/11 ⑩ 観光と観光客の行動 ⑪ 観光と観光客の行動	細田衛士 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
11/18 ⑫ 観光と観光客の行動 ⑬ スポーツと観光	野田洋行 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
11/25 ⑭ 観光と観光客の行動 ⑮ ロシアの観光と観光客の行動	野田洋行 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
12/2 ⑯ 「道下」の地誌を再訪して ⑰ 南極の自然	細田衛士 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授
12/9 ⑱ 月・火曜における 居住の可能性を探る	杉本 志 慶應義塾大学日吉キャンパス 国際観光学専攻 准教授



11月11日の細田衛士講師



修了証の授与

日吉行事企画委員会 (HAPP)

2017 年度秋学期の HAPP の活動

2017 年度秋学期において慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会（以下 HAPP）は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開しました。今年度採択された公募企画は、教員企画が 2 件でした。これらは、10 月 13 日（金）に行われた、薩摩琵琶についての講演およびこれを用いた演奏会である〈ATSUMORI～薩摩琵琶正派が描く武士の生き様～〉と、やはり同時期に催された、国連 UNHCR 難民映画祭の学校パートナーズとして慶應が初参加したイベントとなった〈難民映画祭@慶應〉でした。後者は、10 日間にわたるパネル展示、国連 UNHCR 協会理事長滝澤三郎氏による講演、そして《シリアに生まれて》と題された映画の上映で構成されていました。どちらの企画も、地域住民を含むたくさんの方が来場されました。HAPP の活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できました。

HAPP の活動については、HAPP のホームページ <http://happ.hc.keio.ac.jp/> でご覧頂けます。（石井明）

[HAPP] 2018 年度スケジュール

「歌舞伎のみかた、楽しみかた 犬丸治氏講演会」

4 月 7 日（土） 14:00～15:30
来往舎 シンポジウムスペース

「壺井明 連作祭壇画『無主物』の展示と講演会」

4 月 23 日（月）～27 日（金）
来往舎 ギャラリー、イベントテラス、シンポジウムスペース

「ライブラリーコンサート in 日吉

—図書館がコンサートホールになる 2 日間—
5 月 15 日（火） 2 回 13:30～、17:00～ JAZZ
5 月 22 日（火） 2 回 14:30～、16:30～ Violin & Harp
日吉メディアセンター 1 階ラウンジ、地下 1 階 AV ホール

「〈物語の世界〉no.5 神になりたかった男—ドストエフスキー『悪霊』の世界 亀山郁夫講演会」

5 月 23 日（水） 18:15～20:00
独立館 D201

「塾長と日吉の森を歩こう」

5 月 26 日（土） 13:00～
まむし谷

「雪雄子舞踏公演」

6 月 8 日（金） 18:30～20:00
来往舎 イベントテラス

「〈ことばの世界〉no.4 ドイツ語から見たドイツ 大谷弘道講演会」

6 月 19 日（火） 18:15～20:00
来往舎 シンポジウムスペース

「日吉音楽祭 2018」

7 月 15 日（日）、10 月 6 日（土）
協生館 藤原洋記念ホール

カドベヤ



2017 年度 居場所「カドベヤで過ごす火曜日」 「いつものカドベヤ・大きなカドベヤ」

2017 年で開設満 7 年目を迎えたカドベヤは、居場所の扉をさらに大きく開くイベントを開催しました。まず 8 月には「カドベヤの夏祭り」と銘打って、カドベヤに参加しているメンバー主体に、踊り、歌、絵画など、火曜日のカドベヤで行っているワークショップの成果を学生とアーティストの協力のもと、披露しました。そして 2018 年を迎えた 1 月 13 日（土）には、イベント、「火曜日のカドベヤを土曜日に覗く」を開催。普段の火曜日のカドベヤでの活動—共に体を動かし、何かを表現し、共に作り、共に食べ、後片付けをする、という一連の活動—を「生きることはアートだ！」のモットーのもとに、パフォーマンス形式で参加者と共に楽しみました。この日はアーティストに助けられて、カレー・アートやケーキ作りにもみんなで挑戦。歌作り、後片付けや掃除も参加者みんなで行い、カドベヤの活動を堪能していただきました。また、11 月には日吉キャンパスで、コミュニティ・ダンスとコミュニティ・アートについてのシンポジウムとワークショップをイギリスで活動するインタージェネレーション・ダンスの第一人者、セシリア・マクファーレン氏をお迎えして開催し、コミュニティとアートの関係を会場と共に考察しました。これからも理論と実践の 2 輪をこの小さな居場所を通して回していく予定です。（横山千晶）

教養研究センター選書 18 『ジョン・ラスキンの労働者教育：「見る力」の美学』

この度、2016 年度に一年の研究休暇をいただいた成果を選書にまとめさせていただく機会を得ました。テーマは 19 世紀にイギリスで展開した労働者教育における芸術の意義と立ち位置です。1854 年にロンドンで開設された労働者大学は、ヨーロッパ初の正式な成人教育の機関であると同時に、開設当時から美術評論家として名高いジョン・ラスキンを教師陣に迎えたことでも有名です。しかし、ラスキンが無償で教えたのは理論よりも、むしろ実践でした。それは単なる技術ではありません。「正しく見る」という、階級や職業にかかわらず人が皆、よりよく生きるために身に着けるべき力でした。ラスキンに続いてこの労働者大学の教師陣に参加したのは、ルールに基づいた美術教育に反旗を翻す若手芸術家集団、「ラファエル前派」の画家や彫刻家たちです。ラスキンやこれらの芸術家たちがどのような意気込みで教育活動に参加していったのか、そしてその活動が彼らのアーティストとしての活動に何らかの影響を与えたのか、同時に今からおよそ 160 年前のこの活動は、21 世紀の私たちの教育や芸術観に何らかの影響を与えているのかどうか。この小さな本は、芸術と私たちの生活の関係を、19 世紀のイギリスで起こった労働者教育へとさかのぼって跡付ける小さな試みです。（横山千晶）



**【学会・ワークショップ等開催支援】
Dr. Richard John Curran 講演会
“Conversion and Attire in Early Christian Rome”**

4月2日(月) 17:00～、4月4日(水) 17:30～、
来往舎 中会議室

【HAPP】「歌舞伎のみかた、楽しみかた 犬丸治氏講演会」

4月7日(土) 14:00～15:30、来往舎 シンポジウムスペース

**【HAPP】「壺井明 連作祭壇画『無主物』の
展示と講演会」**

4月23日(月)～27日(金)、
来往舎 ギャラリー、イベントテラス、シンポジウムスペース

【情報の教養学】第2回：田代光輝

「炎上とサイバースペース（集団極性化や社会の分断）」

5月16日(水) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース

**【HAPP】「ライブラリーコンサート in 日吉
—図書館がコンサートホールになる2日間—」**

5月15日(火) 2回、5月22日(火) 2回、
日吉メディアセンター 1階ラウンジ、地下1階AVホール

**【HAPP】「〈物語の世界〉no.5 神になりたかった男
—ドストエフスキー『悪霊』の世界 亀山都夫講演会」**

5月23日(水) 18:15～20:00、独立館 D201

芸術学関連学会連合公開シンポジウム「藝術と教養」

6月2日(土) 13:00～17:00、来往舎 シンポジウムスペース

【HAPP】「雪雄子舞踏公演」

6月8日(金) 18:30～20:00、来往舎 イベントテラス

**【HAPP】「〈ことばの世界〉no.4 ドイツ語から見たドイツ人
大谷弘道講演会」**

6月19日(火) 18:15～20:00、来往舎 シンポジウムスペース

【HAPP】「日吉音楽祭 2018」

7月15日(日)、10月6日(土)、協生館 藤原洋記念ホール

【学会・ワークショップ等開催支援】

「グローバル・オーディエンスに響くストーリーテリング」

7月予定、場所未定

2018年度「庄内セミナー」

8月29日(水)～9月1日(土)、
山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)

4月

5月

6月

7月

8月

9月

学会・ワークショップ等開催支援

当センター所員が企画する研究会やワークショップ等を経費・広報の両面から応援する制度です。所員の方々が参加できる研究・交流の場を広げることを趣旨として、開催に伴う経費の助成や、日吉キャンパス内やウェブでの広報をお手伝いします。

募集は毎年2回、春学期開催分は1月末日まで、秋学期開催分は7月末日まで受け付けています。次回の締切は7月31日(火)です。ふるってご応募ください。なお、経費を必要としない広報支援については随時受け付けています。

【情報の教養学】第1回：福井健策

「ネットのダークマター

—止まらない海賊版でマンガ・アニメは滅びるのか?」

5月9日(水) 18:15～19:45、来往舎 シンポジウムスペース

【情報の教養学】第3回：堀潤

「fake news (仮)」

5月21日(月) 16:30～18:00、第4校舎B棟39番教室

【HAPP】「塾長と日吉の森を歩こう」

5月26日(土) 13:00～、まむし谷

【研究の現場から】第22回：杉山有紀子

「ヨーロッパ・ユダヤ・オーストリアのはざまで

—S. ツヴァイクと20世紀オーストリア文学」

5月30日(水) 18:15～、来往舎 101

【学会・ワークショップ等開催支援】

「アール・ジャクソン教授講演会」

6月30日(土) 15:00～19:00、来往舎 シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援】「北朝鮮シンポジウム」

6月もしくは7月開催予定、来往舎

【学会・ワークショップ等開催支援】

「目指せ、オリンピック・パラリンピックボランティア!」

7月4日(水) 18:15～20:00、来往舎 シンポジウムスペース

【教養研究センター選書 原稿募集】

申込締切日：7月27日(金) 原稿提出締切日：9月28日(金)

求ム・来往最前線情報!

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ(日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先)、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ: toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
(各イベントのお問い合わせはこちらへ)

私の自慢するものがない自慢

2017年11月1日付人事異動で教養研究センター事務長を拝命した大古殿(おおふるとん)と申します。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。さて、題にも書きましたが、正直申し上げて人に話せるほど自慢できるものはありません。楽器とかスポーツとか、何か秀でた特技でもあればかっこよかったのですが、本当に何も無いのです。これはふたご座A型の典型か、もともと若いときから自分のことを積極的に表に出すような性格でもなく、その他大勢に紛れて生きてきましたので、いつの間にかこうなっていました。自慢ではありませんが、強いて自分が好きなことをあげるならば、最良のミュージシャンのコンサートに行くこと、野球をしたり観たりすること、お気に入りの店で食事することくらいで、どれもたいして話が膨らむほどのものではありませんし、こうして書くこと自体憚ります。この年齢になると、もうこれ以上背伸びをしようとは思いませんが、せつかく日吉キャンパスに来たのだし、構内のスポーツクラブでも通ってみようかとちょっと思っている自分がまた憚ります。(大古殿憲治)

